

1/27(日) まいご！倫理塾 11月最終の塾となります。暖かいです。仕草他ハカリ球、仁孝の楽しい時ってリズムが...時かな。やはりやらすかな。

今週の

倫理

時をいこう

孝やまぶアホ-鳥

2022. 11. 26~12. 2

11月のテーマ | 学ぶ楽しさ

1309号

筆者の長女は中学二年生になった今春から学習塾に通い始めました。特に親が勧めた訳でもなく、成績が特段悪いと言う訳でもないのですが「目標をかなえるために、もつと学びたい」という本人の希望に沿って、学習塾に通うことになったのです。週に五日の通塾日は午後七時半から授業が始まり、帰宅は夜九時半過ぎになります。帰宅後も学校の宿題に塾の予習・復習と、机に黙々と向かう姿からは、世間に言うところの「子供は勉強が嫌い」という通説のようなものは感じられません。我が娘の姿を見てみると、「勉強が嫌になる子供は、いつ、なぜ、嫌いになるのだろう」という疑問が湧いてきました。生まれてすぐの乳児が、鉛筆を持ち教科書を広げて勉強をする姿を見ることはないでしょう。子供が手に道具を持ち、言葉を話せるようになると、様々な「学び」に接していきます。その姿からは「勉強が嫌い」という雰囲気はなく、むしろ何かを学ぶ毎に「嬉々として」楽しんでいる、正に「学ぶ楽しさ」を体現している姿と言えます。生来の「勉強嫌い」はないはずなのに、どこかで「嫌い」になってしまふのです。大手学習塾のウェブサイトに「子供が勉強嫌いになる理由」と題した記事が紹介されています。総じて「分からないから」ということが大きな要因であるようです。子供に限らず「分からない」という状態は、物事を楽しめない最大の理由でしょう。しかし「分からない」を「分かる」ように

経営者自らが 学ぶ楽しさを実感しよう



するのが勉強であるなら、この理由は的外れでしょう。記事では、さらに「命令される」や「比較される」といった理由が紹介されています。これらも相応の嫌う理由ではあっても本質ではないでしょう。では「勉強嫌い」にならないための大切な視点は何か。それは、「何のために学ぶのか」という目的が明確であるかどうかです。学ぶ目的が明確であれば、たとえ、分からなくなつて楽しみが失せたとしても、嫌になることはないはずなのです。こうしたことは子供の勉強だけの話ではなく、企業での社員の技能向上や知識の習得にも同様に当てはまります。社員が「学ぶ楽しさ」を感じられるように目的を明確にするのは経営者の役割と言えるでしょう。さらに一歩進めて「純粋倫理」の生活法則に照らす時、「子供は親の鏡」であり「心に思っている事でさえ、そのまま親の身代わりに実演する」のですから、子供の勉強に対する姿勢は、親自身の「学ぶ」姿勢に根本原因があると考えます。同様に経営者と社員は親子のような関係だと言えるでしょう。社員の成長が芳しくないのは社員の「学ぶ」意識の低さではなく、経営者自身の「学ぶ」姿勢の欠如を反映していると捉えることもできるのです。人に後ろ姿を見られている親や経営者は、自分自身が「学ぶ楽しさ」を実感できるような環境を整えるべきなのです。そうすることで、周囲が「学び」に対して前向きになれるということを肝に銘じておきたいものです。

遅くなりまへ、十一月第一旬まで、
「え」紅葉も心色ももみどろえ

12/3(土) まいど、倫理号です。いかに師走です。今年も残り1ヶ月、悔いのない年になります。忙しい時こそ深呼吸して望みたいですね。

草七道心マホ一鳥

今週の

2022. 12. 3～12. 9

倫理

12月のテーマ | 自分との対話

1310号

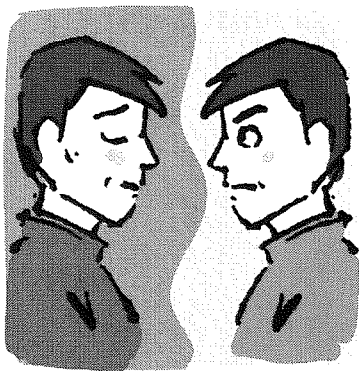
毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

八十五歳になる知人が訪ねてこられた。四十年来のつきあいだ。

昨年は二回ばかり、ひっくりかえったり、つまづいたりしたが、それはすべて家の中だった。一回目は伊豆の温泉に友人といっしょに出かけ、階段からすべり落ち、脳震盪をおこして救急車で病院にはこぼれた。二回目は自宅の玄関のところですべり、身体を打ってひどかった。外では気をつけているので、ころんだことは今までない。けれども屋内では油断をされていて、かえってあぶないものだと分かった。

油断をしていなくてもいろいろ原因で事故にあうことはもちろんあるのだが、外よりも家の中が多いという話は傾聴に値するのではあるまいか。そこには年齢や性別を越えてすべての人にあてはまる真理が秘められているからだ。

「さあ、気をつけなくては」とか「いざ勝負」とか「それ、やるぞ」などと気を張っているときは、事故は起こりにくい。しかし「これで終わった」とか「ヤレ、ヤレ」とか「人がいるから安心だ」などと気を抜いたときにすべりころんだり、放心しているときひっくり返ったりする。危険な曲り道よりも直線道路をスイスイといくとき気をつけるのはドライバーの心得だが、そう



心のたるみが事故を生む

丸山竹秋

と分かっているにもかかわらず、心はたるむものである。

獅子身中の虫といわれて、内に育ったもの、味方、恩をほどこされたものなどが反逆することだが、これはまた別の意味で「鬼は内」ということになる。その身中の虫が、つまるところは自分自身であることもかなりあるのではないか。

たいせつにしてきた自分が、自分自身に反逆して、いうことをきかないどころか、食ってかかるといようなケースである。「油断してはいけないぞ」と自分自身に注意すると、「ナニ構うものか」と反抗してくる。自分の命令をきかない自分自身があるということだ。そうした場合にどうするか。ここに興味津々たる生きた問題がある。

競争、勝負ごとなどといったものも、相手の人というよりも、けつきよくは自分自身との勝負であり、競争だという。マラソンなどという孤独なレースは、自分自身とのたたかいをもっともよく表わすといわれるが、しかし煮つめていくと、すべてが自分自身を相手にすることとなる。

家の中にいようと外にいようと、どちらが油断しやすいかというまわりの条件が変わるだけで、いつも同居しているのは自分自身なのだ。

この自分自身をたたかいの相手ときめつけるのか、それともよき競争相手とみて、仲よく励ましあっていくのか、これは死ぬまでのおもしろい問題だ。

たのしい人生ではないか。

『つねに活路あり』より